

石黒鏘二の清正像

本丸表二の門につづく二之丸の境際に石黒鏘二^{いしぐろしょうじ}(昭和10年[1935]–平成25年[2013])作の《清正公石曳きの像》(昭和54年[1979]制作)があります。

この像は、名古屋北ライオンズクラブの寄贈により昭和55年(1980)に本丸に設置されました。東一之門跡の南、本丸東側の石垣がわずかに折れ曲がる窪みのあたりです。その後、将来の整備に支障となる恐れがあることなどから、今の場所に昭和58年(1983)に移されました。

石黒は、野外彫刻などのパブリック・アート(公共芸術)を手がけたことで知られており、名古屋市内にも多数の作品が設置されています。名城公園の東南入口にある《浮遊》(昭和58年[1983]制作)はそのひとつです。《浮遊》のようなステンレス・スチールによる抽象的な造形が石黒の代表的な作風です。

石黒ははじめ、鉄板を鍛造と溶接で形成した人物像などで評価されました。清正像を制作した頃は、ステンレス・スチールへの関心を深め、作風を変えつつありました。一方で、清正像と同じブロンズ鑄造による具象彫刻を注文により制作していたといいます。石黒自身が編集出版した作品集に清正像をはじめとするブロンズ鑄造作品は含まれておらず、今ではそれらについて知る人も少なくなっています。

石黒は東京藝術大学に学び、卒業後に就職したマネキン製作会社で鑄造や鍍金などの金属加工技術に習熟しました。清正像は、石黒の造形技術が確かなものであったことを示しています。また、過渡期にあった石黒の造形を考える上でも貴重な作品です。

清正の石引きは、『尾張名所図会』の挿図「加藤清正石引の図」が良く知られています。石黒も参照したはずですが、いくつか相違する点があり、顔もあまり似ていません。筆者は、石黒の清正像に70年代のはじめから口ひげと顎ひげを蓄えていた作者の面差し

を感じます。今では本人に確かめるすべがありませんが、清正の姿を借りて、悩み迷う自身を奮い立たせていたのかもしれません。

石黒を含めてこの地域の近代彫刻は歴史的研究がはじまったばかりです。二之丸の整備が進み、再び支障となることがあっても、城内にかかわらずまだどこかに移設し、保存したい作品です。

(学芸員 角田美奈子)



▲《清正公石曳きの像》



▲《浮遊》

※いずれも令和5年(2023)筆者撮影

名古屋城 調査研究センターだより

第5号

2024
3

「名古屋城学」をめざす 一名古屋城調査研究センターの5年―

令和元(2019)年度に名古屋城調査研究センターが発足してから5年が経過しました。市民の悲願である、昭和20(1945)年5月14日の空襲で失われた国宝名古屋城天守の復元に向けて、学問的課題を解決しつつ、側面から支援していくという大きな目的があり、今も継続しています。

令和6年(2024)3月現在学芸員・事務職をあわせて23人の体制で(うち併任1名)、年齢的にも20代が5名、30代が6名と半分を占めており、きわめて若い組織といえます。学芸員のうち、文書典籍・美術工芸担当が歴史資料・美術資料の調査と保存公開、西の丸御蔵城宝館の展示を担当し、考古担当が特別史跡・名勝指定区域とその周辺の発掘調査や調査資料の整理にあたるほか、整備工事に伴う現場立会も担当します。全体として名古屋城の整備に向けた有識者会議への準備・対応もします。名古屋城の研究を推進する強力な体制が揃いました。

この組織体制では多くの分野にまたがるスタッフによって、カベのない多彩で学際的な方法を駆使できます。絵図・地図の視角から、文献の視角から、現地の踏査、発掘調査成果や遺物(天守焼損金具を含む)の調査から、多くの新視点が総合的に獲得できました。十分ではなかったところもありますが、さらに今後、方法は磨かれていきます。

研究成果としては、5年間で研究紀要5冊、埋蔵文化財調査報告書7冊、資料調査研究報告書1冊、史料集2冊、年報4冊、調査研究センターだより5号を刊行しました。これらの成果は名古屋城公式ウェブサイト等でどこからでも閲覧できるようになっています。また、シンポジウムや講座のような普及啓発事業を通じて、名古屋城を愛する市民・国民の要求に応えうる成果を出してきました。名古屋城の歴史に関して、これまでいわれてきた通説を5年間で少しずつ書き替えてきました。

これからも課題は山積みで、さらに解決すべき課題は多くありますが、皆さまの期待に応えつつ、われらが総合学＝「名古屋城学」を推進していきます。

(所長 服部英雄)



▲天守台礎石での刻印調査の様子



国登録有形文化財 乃木倉庫へようこそ



乃木倉庫 外観(南西面)

名古屋城の西北、御深井丸の奥にたたずむ白い倉庫。乃木倉庫と呼ばれる陸軍の弾薬庫で、平成9年（1997）国登録有形文化財に登録された。

令和5年（2023）11月29日（水）から12月10日（日）まで、久しぶりに内部を公開した。事前調査により、乃木倉庫の創建年代や乃木倉庫という名称の命名時期などを明らかにすることができた。小さな倉庫が背負ってきた、名古屋城近代史の象徴ともいべき数奇な歴史を、ここに紹介する。

1 乃木倉庫の創建



皇居三の丸尚蔵館所蔵 「基太村不二肖像写真」
明治十二年明治天皇御下命『人物写真帖』より

江戸時代、御深井丸には西北隅櫓はじめ土蔵や穴蔵が林立し、大量の鉄砲と弾薬類が保管されてきた。明治維新後の明治11年（1878）、陸軍は、仙台・名古屋・広島各鎮台に弾薬庫を作ることとし、特に名古屋鎮台においては、「旧来の隅櫓を修理しつつ使用してきたが、老朽化し民家も近いので堅固な弾薬庫を作るべき」とし、御深井丸に「予備弾薬庫」を建てる（防衛省防衛研究所蔵『陸軍省大日記』）。同研究所蔵『季報』によれば、レンガという目新しい材料を使用したためもあり工事は遅延したが、明治13年10月、「予備弾薬庫」が完成した。工事の担当官は、明治12年から名古屋鎮台に勤務していた工役長基太村不二であった（国立国会図書館蔵「官員分課録 袖珍銅鐫 明治12年11月改正（上）」）。

2 乃木倉庫の図面と現状

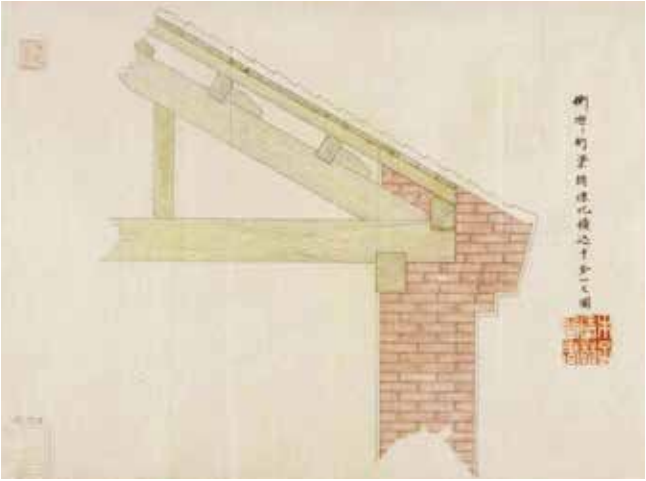
基太村不二が引いたかどうかは定かではないが、陸軍作成とみなされる図面類が、宮内省の建築技師であった木子清敬の所蔵資料の中に現存している（東京都立中央図書館蔵・木子文庫）。基礎や壁の構造を絵画的に描き淡彩を施すもので、通常の設計図とは様相を異にする。木子は、明治24年（1891）10月28日に根尾谷を震源地として発生した濃尾震災直後、陸軍の依頼により被災状況調査のため名古屋城を訪れており、そうした機会に陸軍から提供されたものと思われる。

さらにこの図面は、同じく震災調査のため来城したイギリス人建築家ジョサイア・コンドル（1852～1920）にも示されていた。コンドルは、乃木倉庫を powder magazine（火薬庫）と表記し、図面作者は「科学的目標をなんら有しない素人」と断じつつも、「壊れていない市内唯一のレンガ建築で、塗壁にも傷ひとつない」と称賛している（和訳筆者・Josian Conder 1891「An Architect's Notes on the Great Earthquake of October」『Seismological Society of Japan』）。

本図面によれば、壁はレンガを2丁半ずつ積み上げたもので、積み方はイギリス式とフランス式が混在し過渡期の様相を呈している。基礎には伊豆の凝灰岩と三河の花崗岩を敷いた上にレンガでヴォール

トを組み、その上に大引と根太を密に置き、さらに厚い床板を二層に敷いている。屋根はトラスで支え、野地板を並べ漆喰を塗った上に棧瓦を葺いている。入口扉と窓は、アーチ状の両開き式板戸に銅板を貼るもので、弾薬という火気と湿気を嫌う重量物を納めるための工夫と考えられる。

床の構造は、点検口や通気口から覗くことができる。令和5年（2023）に行われた外壁修理の過程で、漆喰下のレンガも確認できた。



「側廻り桁梁請煉化積込十分一之図」 東京都立中央図書館蔵 木子文庫

3 名古屋離宮期の乃木倉庫

濃尾震災後の明治26年（1893）、名古屋城の本丸は陸軍省から宮内省へ移管され「名古屋離宮」となった。御深井丸は、明治42年（1909）宮内省に編入され、第三師団が御深井丸内に建てていた武器弾薬庫の大半が破却された。しかし予備弾薬庫は、その特殊かつ強固な構造から破却をまぬがれ、「第一倉庫」という名称のもと宮内省で管理された。

大正4年（1915）と昭和3年（1928）の御大礼（天皇即位式）において、名古屋城本丸御殿は大正天皇ならびに昭和天皇の御宿泊所となり、御深井丸には宮中三殿の一で神器を祀る賢所の行殿が造営された。そのため御深井丸は大整備されたが、第一倉庫は壊されず、当時の写真や図面から、行殿が第一倉庫の隣に造営されたことが確定できる。

4 名古屋市下賜と乃木倉庫の名称、名古屋空襲

昭和5年（1930）、名古屋離宮は名古屋市に下賜され、同時に天守・本丸御殿などが国宝に指定された。翌年2月11日から市民への天守公開が始まるが、拝観者に渡された名古屋城の略図には、第一倉庫が「乃木倉庫」の名称で表示されている。乃木希典が名古屋にいたのは明治5～6年と23～25年に過ぎず（『乃木希典日記』による）、「予備弾薬庫」建築とは関係がない。しかし乃木は、日清・日露両戦争で勝利し明治天皇に殉死した名将軍として、当時熱狂的に崇拜されていた。公開時、名古屋市は本丸搦手の巨石を「清正石」と命名しており、清正もまた朝鮮侵略の立役者として軍神視されていた。これらの命名に、世界戦争へと歩んでいく世相を感じとることもできよう。

そして乃木倉庫命名のわずか10年後、第二次世界大戦が勃発する。昭和20年（1945）春、戦局悪化を受け国宝本丸御殿の襖絵類がとりはずされ乃木倉庫に運びこまれた。搬入直後の5月14日、空襲により本丸御殿は全焼したが、乃木倉庫内の襖絵は焼けなかった。それら空襲を免れた本丸御殿障壁画1047面は、戦後重要文化財に指定され、西の丸御蔵城宝館の専用収蔵庫で大切に保管されている。

弾薬庫として造営された乃木倉庫は、濃尾震災、二度にわたる所有者変更、焼夷弾攻撃など、存亡の危機にたびたび襲われた。しかし、異例ながら堅固な構造ゆえそれらを乗り越え、本丸御殿障壁画という名古屋城の至宝をも護り、今なお創建当時の地にひっそりとたたずんでいる。

（学芸員 朝日美砂子）